

矢田川物語 小林元著 昭和五十五年

三 上代と中世

齋忌齋田

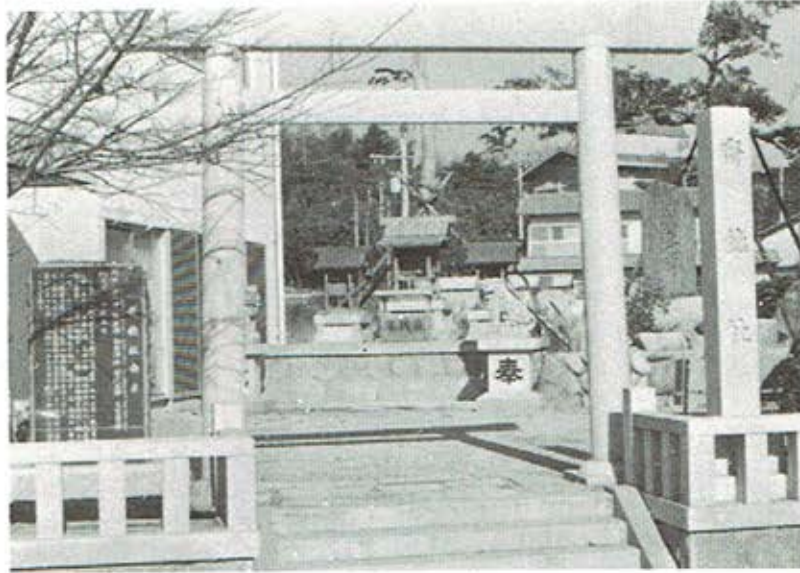
矢田川流域のことがはじめて文献に出てくるのは『日本書紀』の天武五年（六七六）の「神祇官奏して曰く、新嘗のため国郡を卜する也。齋忌則ち尾張国山田郡……」

という記述でしょう。新嘗は「にいなめ」とも読み、天皇がその年に実った新穀を神々に供え、自らもそれを食することを意味し、その祭事は旧暦の十一月の中の卯の日に行われました。戦前は「新嘗祭」として十一月二十三日が祭日になっていたことを記憶している人も多いと思われます。「齋忌」は「悠紀」とも書き、その新穀を献上する国郡のことです。齋場を左右（東西）に分け、そのうち左方、すなわち都



齋田の碑(澁川神社)

より東に当たる国郡を齋忌といい、右方すなわち都より西にあたる国郡を「主基」といいました。齋忌、主基にあたる国郡は占いによって決められました。天武天皇五年の齋忌には尾張国山田郡が、主基には丹波国訶沙郡が当てられました。山田郡の名称は戦国時代以



齋 穂 社 (大森東山ノ田)

後使われなくなりましたが、後の愛知郡北部と春日井郡南部を含む地域で、矢田川流域がその中心でした。そしてその齋忌齋田が設けられたのが印場渋川の地であったと伝えられます。もともと印場の地名の由来もこの時の「齋場」から転化したものともいわれます。

印場の渋川神社の境内に「天武天皇悠紀齋田跡」と記された大正五年（一九一六）建立の大きな石碑があります。碑の裏面に「天神川南字渋川附近之地是也」と書かれているように、齋田が設けられた渋川の

地は、今渋川神社がある場所ではなくて、もっと南西、大森から行けば千代田街道をまっすぐ東へ、東名高速道路につき当たった付近で、大森とはつい目と鼻の先です。この周辺の土地を地元の人たちは「ソブコ」と呼んでいます。「ソブ」とは地渋のことで、湿地に汚水がたまって鉄さびのようなものが浮かぶ状態をいいます。

「村民今謬ッテ曾武川ト曰フ」 『張州雑志』

とあるように「渋川」をなまって「ソブコ」と呼ぶようになったという説もありますが、これはむしろ逆で「ソブコ」に「渋川」の字を当てたのではないかと思われます。天神川と矢田川にはさまれた湿地で、水面によくソブが見られたからですが、一方稲作の面から見ればここは水田としてもっとも適した土地だったので、齋忌齋

田がここに設けられた理由もうなずけません。中世になってこのすぐ東に印場城が築かれ、今も土塁の一部が田の中に残っていますが、印場の中心としてこの地は後世になっても重要視されたのでした。

さて齋田で実った稲穂は北西方の大森字東山ノ田の「齋穂社」に運ばれ、ここで新穀を精選して天皇に献上したとのことです。齋穂社は瀬戸街道の北側にあつて、その後俗に「伊保里塚」とか「疣塚」とも呼ばれ、一時は荒廃したこともあつたらしいのですが、整地後はさらに北西方に場所を変えてりっぱに再建されています。

白晴と階所

七世紀にこのあたりに齋田が設けられたということは、当時すでに矢田川流域にかなり水田が開かれていた証拠なのですが、人口の増加とともに耕地が開発されていったいきさつをたどってみましょう。

はじめのうちは矢田川の水はほとんど利用されませんでした。矢田川は村のもっとも低い所を流れているので、当時の技術としてはそれを高い場所へ導くのは不可能なことでした。一般に大きな川から用水を引くには大規模な土木工事が必要で、洪水になった時の川水の制御もたいへん困難でした。ため池などはもちろんありませんから、まず頼ることができたのは天然のわき水でした。大森の丘陵地に降った雨は地中にしみこみ、やがて泉となつて山の麓に出てきました。今の瀬戸街道のすこし南方には、そんなわき水が出る場所があちこちにありました。大森の西端の「大清水」などはさしあたってそんな場所でした。印場の旭野高校の付近の地名を「越水」といいますが、これは「小清水」のことでしょう。大清水にあつた